詩人としての赤松月船

定金　恒次
倉敷芸術科学大学留学生別科

（2008 年 10 月 1 日　受理）

1　はじめに

岡山県浅口郡鴨方村（現浅口市鴨方町）出身の赤松月船（1897 ～ 1997）は曹洞宗の高僧で，権大教正という顕職にまで昇進した人であるが，沙弥時代から文学書を愛読し，詩作にも手を染めるほどの執着ぶりであった。青年期に入って仏門修行中にも文学への渇望は押さえがたく，一時僧籍を離れて上京，生田長江（当時我が国評論界・翻訳界の第一人者）に師事して本格的に詩才を磨いた。詩人として大成した後は自ら同人詩誌を主宰して後進の育成に力を注ぐほか，各種詩誌の選者や編者としてめざましい活躍をした。

また，戦時中は住職（昭和 11 年仏門に復帰）を務めるかたわら，村長･大政翼讃会会長･産業組合長等も兼務するなど多方面にわたって活躍した。こうした多忙な時期においても絶えず詩作精進は怠らず，特に晩年は「連峰」同人として詩作に精励，100 年にわたる長い生涯において独自の詩境を開拓した。日本詩壇の興隆に寄与した功績は極めて大きい。

一方，幅広い文筆活動を精力的に展開，仏典解説書・詩論書・小説・随筆・童話の執筆のほか，数多くの詠讃歌や校歌の作詞も手がけた。特に詠讃歌の作詩においては我が国の第一人者と目され，その業績は斯界から高く評価されている。本論文では「詩人」としての赤松月船に焦点を当てて論述したい。

2　大藤治郎の詩観に共鳴

生田長江（1882 ～ 1936）門下で詩才を磨き，1925（大正 14）年第一詩集『秋冷』を出版した赤松月船は自他共に認める詩人としての地歩を確立する。当時，大藤治郎が編集を担当していた詩誌「詩聖」は月船をゲストとして迎え入れる。

同誌はまた，月船を中野秀人，橋爪健らとともに投稿詩の選者に委嘱する。月船は，大藤の「今，そこに私の詩が書き上げられる，といふ信條がない以上，詩はその人のものではありません。過去に同じ人間がなかつたやうに，詩人の諸相は瞬時に新しいものです。瞬時に新しいものであるが故に，詩は最も個性的なものです。[(1)]」という作詩に対する抱負，特に「詩は瞬時に新しいものを捉えたものであり，したがって個性の活躍の極めてあざやかなものである。」という詩観に共鳴して同誌を積極的に支持した。そして意欲的に詩壇評論に健筆をふるったり，投稿詩の選をしたりするのである。

３　同人詩誌主宰

月船は1925（大正14）年，自らが主宰して同人詩誌「朝」（のち「氾濫」と改題）を出す。同人には佐藤八郎，大木篤夫，村田春海，吉田一穂らの俊秀が名を連ねていた。また詩人の道を志す草野心平，木山捷平，黄瀛（こうえい）（中国の詩人・日本の陸軍士官学校卒業後，国民政府軍の高級将校となり，戦後投獄されるが晩年は名誉を回復，四川外国語学院日本語学部長，重慶市人民代表などの要職につく）らの新人も同人として参加した。月船はこの同人誌を通してこれらの新人を育てあげ，一流の詩人として世に送り出したのである。なお，月船門下で育った草野，木山，黄瀛の３人は，国境を越え生涯の友として終生親交を続けていく。（これについては拙著「慧僧詩人赤松月船」に詳述）

４　『新興詩人選集』の編集・出版

月船は1930（昭和５）年１月，佐藤八郎，神戸雄一と共編して文芸社から『新興詩人選集』を出版した。Ｂ６判，216ページで定価は１円。この選集には木山捷平，北川冬彦，草野心平，黄瀛，サトウハチロー，中野秀人，中野重治，萩原恭次郎，林芙美子，三好達治ら，当時活躍していた詩人48人の詩99編が載録されている。序文には，「これはアンソロジーとして今まで出たあらゆるアンソロジーの中で最も鋭さのこもつたものである。単に年刊として編まれたものではない。又，何人かの，たとへばその人が五十歳になつたとか，外国へ行くとかいふやうなことのためにデヂケートさるべく編まれたものではない。若し強いてデヂケートされなければならぬとすれば，この集はまさしくわれわれ自身にデヂケートされるべきである。若し何等かの紀念を意味するものならば，この集はまさしく時代の新鮮を道標する。繰返していふ，これはアンソロジーとして今まで出たあらゆるアンソロジーの中で最も鋭さのこもつたものである。編者は自信を負ふてこれを世におくるのである。(2)」と記し，その気概と自負の念を吐露している。

この選集に，月船は自らの詩「春が来た」「五月」「午後」の３編を載せている。

春が来た　病める妻であつた。／私はその枕頭に菜の花を挿した。／妻はくるりと寝がへつた，後（うしろ）を向けた。／「お前は好きではなかつたのか，この花が」／妻は答へた。／「好きなのよ，大好きなのよ／でも，わたしの病気はあんまり長すぎるわ」

五月　潮（うしお）の色は／何ていい一すじだらう！// 見てゐると／雨上がりだといふことが身體にひしひしする。／風が颯（さっ）として／二里四方の麥の穂が揺れても／潮のいろは／實にふくよかな一すじに／くつきりと空近く浮かんでゐる。

午後　ユリ子ちやんは手に紙袋を下げてよちよち歸つて來た。／小父さんは汗を拭き拭きいふのであつた，／「菓子屋の前でにじり坐つて動かないものだから，到頭買はされちやつた」／「お菓子なんて買ふ兒は馬鹿だよ」／おかあさんが云つた。／「さうを……おかあちやんいい兒？」／ユリ子ちやんは，紙袋をあけてドロツプを一つ口の中に入れた。／「おかあちやんはいい兒ですとも」／「お菓子買はにやいから」／

又一つ口の中にいれた。それから思ひ出したやうに，／「小父ちやん　馬鹿，小父ちやん　馬鹿な兒ねエ」

「五月」は明るく，さわやかで，みずみずしさにあふれた詩である。情景が鮮やかにとらえられ，研ぎ澄まされた心が伝わってくるような詩である。この詩を読んだ間野捷魯は，後年次のように評して絶讃している。

これは今から四十年前の月船さんの詩です。（中略）ともかくも私はこの作品を読みかえしてみて，その長い歳月の流れや激変した時代の推移というものをいささかも感じとることができないのです。たとえばこの詩がかりに昨日の日に作られたものだとしても，その鮮烈な感動を否定することはできないのです。

詩の真実性はこのように時代を越えて生きつづけるものでしょう。非礼な言い方ですけれども，赤松月船という詩人が“ほんもの”であるということなのです。月船さんには『秋冷』という詩集があり，昔私はその読後感も書いたこともありました。極めて素直にひと口申しせば，『秋冷』という題名こそがそのすべての作品を貫いている彼の詩精神といってもよいのではないかと思うのです。「五月」のうちにもその詩精神は流れています。“清純”とか“簡潔”とかいう言葉はこういう詩のためにあると思うのです。

月船さんは自らの詩の“ことば”を非常に大切にする詩人です。一つ一つが選ばれた言葉であり，決して無駄がありません。そのことは当然，うつくしい簡潔に通ずるのです。詩人はいかにして“自らのことば”によって表現するかに苦渋するのですが，月船さんは稟質的にも豊かなものを蔵しており，さらにつややかな磨きがかかっているのです。私は月船さんの詩を読むたびに心の洗われる思いをします[(3)]。

5　第二詩集『花粉の日』

月船は1930（昭和５）年12月，第二詩集『花粉の日』を交蘭社から出版した。これには大半が第一詩集『秋冷』以後に作った詩（計73編）が収録され，表紙に「新鋭詩人叢書」と付書している。Ｂ６判函入，142ページで定価60銭。詩集の構成は目次・本詩（５部に分かれる）・あとがきとなっている。

ここで第一詩集（28歳）から第二詩集（33歳）に至るまでの月船の詩的世界の進展と感性の深まりを概観してみたい。第一詩集では自然や季節を詠じた詩が70％近くを占め，人生や処世を詠んだ詩はわずか15％に過ぎない。ところが第二詩集では両者（自然・季節と人生・処世）の占める割合がほぼ拮抗しているのである。ということは，５年の歳月を経る間に月船の思惟・関心が大きく人生（いかに生くべきか）に移っているということを如実に物語るものといえよう。さらに同じ自然観照詩でも，第一詩集よりも第二詩集のほうがはるかに研ぎ澄まされた鋭敏な感性でとらえ，かつ躍動的に表現した作品が多くなっているのである。その具体例をあげてみたい。

「月」を題材にした詩が第一詩集に５首，第二詩集に２首載録されているが，そのうち「月光」に焦点をあてたもの各１首を比較してみる。

第一詩集　月はのぼりぬ／その青き光りは／孤(ひと)りなる生物(いきもの)のおもひを濡らし／樹樹の紫ばめる梢より／靄淡き夜のしめやかさに／甘美なる匂ひをはなたしむ　（月）

第二詩集　まよなかの凄さは／トタン屋根に下りた霜／みしみし鳴るのは／頭の中の月光！　（月光）

前者は青く光る優美な月光が夜露の降りたあたりの風物を静かに照らし，蒼然たる樹々から甘美な匂いを発生させているようだという伝統的で静的な表現。ところが後者では，「月光」の強烈さをトタン屋根に降りた霜と対比させ，「光」が「みしみしと鳴る」という奇抜で壮絶な表現をしている。前者が静的な「色彩嗅覚表現」であるのに対し，後者は動的な「色彩聴覚表現」である。つまり後者は感覚的にもより研ぎ澄まされ躍動感のあふれる詩となっているのである。

月船はこの詩集の「あとがき」で次のように述べている。

――少女詩のやうなものまではいつてゐるのは些か汗顔の至りだが，併しいろいろなものが交り合つた味も面白いかも知れぬ。或は思ひがけぬところで作者はつつみ隠しのない自分をぶちまけてゐるといふことがあるだらう。（中略）

私は自分で自分の詩を詩みかへしながら，コスモスや山吹や雨霽れの朝や，それからいつまでも月光がこんなに好きなのかと驚いた。

透明な，或はすがすがしさ，といふやうなものがいつまでも私を感動させるらしい。が詩といふものはそれだけのものではなくて，それだけがあらはれてゐるといふべきもののやうに私はおもふ。どんなひろがりがあつても三角形の頂点はきまつて小さいものである[4]。

これは月船の詩人としての自らの特徴と自らの詩論を端的に開陳した注目すべき論述である。「どんなひろがりがあつても三角形の頂点はきまつて小さい」という比喩は，先輩詩人佐藤春夫に言わせれば「多くを感じて尠(すく)なく言ふ[5]」ことであろう。それはまた，瑞応寺（月船が1914年から２年間修行した寺。曹洞宗の中四国専門道場）以来の畏友中西悟堂の「饒舌(じょうぜつ)とはほど遠い含蓄[6]」という言葉にも通じる。すなわち，「詩」は心のアンテナを存分に働かせ，多く豊かに感じ取ったことを，錐(きり)のように鋭く，研ぎ澄まされた言葉――ものの本質を端的につかんだ言葉で簡明直截(せつ)に表現しなければならないという意味に解される。

また，月船門下の木山捷平は，この詩集に対して次のような賛辞を寄せている。

この詩集の中には，純粋のあるべき「幸福」な「恋」はあつても失恋，悲恋の詩は一つもない。あの人は淋しがることのかはりに，胸をときめかしてゐる。あの人は病気をしてゐても病気してゐない。あの人は貧乏してゐても貧乏してゐない。その意欲

の尖端は「コスモス」の花のやうにゆれてゐるのである。（中略）そのどつしりと落ち着いてゐるあの人の生活の風采を私は美しく思はずにはゐられない[7]。

6　岡山県平川村時代

月船は，日本が日増しに軍国化への歩みを強めていた1934（昭和９）年10月，国際情報社大法輪閣に入社。創刊された宗教誌「大法輪」の編集を担当することになる。「大法輪」は仏教界唯一の総合専門雑誌で，各宗派を通しての文化，教化運動の中心であったため，仏教界における月船の名前は全国的に知られるようになった。

こうして東京に腰を落ち着け，詩作の傍ら文化活動に専念しようと決心した月船であったが，宗門からの強い要請はそれを許さなかった。折しも宗門では洞松寺後継者をめぐる問題が発生し，月船の帰郷を促したからである。このとき月船は，同じ帰郷するなら山峡の静寂な地をあえて希望した。

かくして，東京での18年間の文学活動に別れを告げ，1936（昭和11）年２月，岡山県川上郡平川村（現高梁市備中町平川）の観音寺住職として仏門に復帰する。時に月船39歳であった。

月船が山門に復帰した平川村は，山深い村の常として活気と変化に乏しかった。しかも村民たちには天領意識が残っていて自尊心が強く，ある意味でむずかしい面もあったという。血気盛んで進取の気象に富んだ月船は，「むずかしいからこそやり甲斐があるのだ。」と見栄を切って帰って来たのであった。

村議会の勢力は，二つの派が８対８で均衡を保ったまま何10年も変わることはなかった。ところが日中戦争が始まり，戦時体制が強化されるにつれ，国策遂行をめぐって議会内に鬱積していた対立が表面化。それは収拾のつかない紛争へと発展する。月船は村の幹部から，「住職は東京から来たのだから，村内いずれの派にもつかない白紙の立場で判断してほしい。」と調停を依頼される。月船はこの紛争を見事に調停して円満解決に導く。その手腕が評価され，信望を得た月船は懇願されて村の助役に就任する。１年ほどの助役務めであったが，その時の村長は医者であった。当時，月船は「医者と坊主がコンビを組んでいる平川村は，よほどむずかしい村なのだなあ。」と友人たちから笑われたとの由。

月船は助役としての仕事も見事に処理する。その卓越した行政手腕をかわれて1941（昭和16）年には村長に推挙され，1945（昭和20）年の終戦まで務める。時あたかも太平洋戦争のさなかである。月船は住職と村長の要職をこなしながら，森林組合長・産業組合長等の役職，在郷軍人会・大政翼賛会等の責任者も兼務し，はては召集された兵士の見送りから帰還英霊（遺骨）の出迎えに至るまで，八面六臂の活躍をするのである。

月船はこうした激務を処理しながら，自らの詩人としての精進も怠らなかった。折しも太平洋戦争のさなかであったが，この時期に10余編の珠玉の作品をものしている。その中の一つ，「雁」と題する詩を掲げてみる。

「あの声は？」／窓をあけると，／月の出らしく前田のあたり／ほんのり明るみがさしている／こちらは山かげで暗いのだけれど。

稲はぜの上が／しらじらとしているのは／もう霜がおりているのか知ら！／グワッ！／グワッ！

呼ぶ声。／応える声。／互いに鳴きを交しながら／晴れわたつた空を／姿も見せないで渡つて行つた。

1941（昭和16）年，平川村長在任当時の作である。――突然，山里の夜の静寂（しじま）を破る雁の鳴き声。とっさに窓をあけて空を見上げる。しかし姿は見えない。前眼にひろがる山あいの田圃（たんぼ），稲架（いなはぜ），白々と降りた霜。淡い月光……。と，またしても呼び交わす雁の声。目を凝らして晴れ上がった秋の夜空を探す。やはり姿は見えない。声だけを残して渡り行くかりがねの姿に思いをはせながら，澄みきった夜空をしばし見つめる。――

聴覚を通しての動的な現象と，視覚に訴える静的な情景とを見事に融合させた名詩といえよう。日常生活における瞬時の，さりげない体験をかくも鮮やかに詩情豊かにうたいあげているのである。古歌に「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明けの月ぞ残れる」（千載集巻三）がある。後徳大寺左大臣藤原実定（1139 ～ 91）の作で，月船の詩と同様の題材を同様の手法で歌っている。「耳でとらえ，目を凝らしたけれど，姿は見えない。」という構図が同じである。藤原定家の百人一首にもとられ，古来名歌との定評がある。しかし両者を比べてみると，月船の詩のほうがはるかに躍動的で詩情が豊かである。見えない雁の姿を心で追っている点に余韻が強く漂い，しかも姿を見せないで飛び去る雁の様子を髣髴とさせてくれるところに格調の高さを感じる。

このように月船は平川村長在任中，その激務にもめげず詩作を続けていた。しかもその詩たるや，職務上の苦悩や世俗の煩わしさを微塵も感じさせない，清らかでさわやかな心情をすがすがしくうたいあげているのである。ここに月船の詩の真骨頂がある。

次に掲げる「季節の贈り物」（1936年作）も日常生活でのさわやかな感動をすがすがしく歌った詩である。

キャベツ――／ジャガイモ――／玉葱――／季節の野菜の数々を／村の人が次々に持つて来てくれる。

抱えきれぬ大きなキャベツを／世にも尊い白玉のようにおもい，／ジャガイモの紅潮（べにさ）した艶やかさを／さて，なんといつて賞めるべきか？／ほりたての，／土まみれの，／その土さえが／はつはつと呼吸ずいているではないか！／日毎の労苦と／丹精のありたけとが／こんな形のととのつた／清浄で，／きびきびした円球に結実する／比類なき変貌（トランスフィチュレエション）！／もし，不思議ということがこの世にあれば／これこそが本当の摩訶不思議！／しかも何たる明晰な事実！／私は玉葱を盛り上げた籠を前にして感動する！／次々の贈物は，／朝夕の食卓を／――私の心の食卓を潤沢にする！

村人の労働への称賛と贈り物への感謝の情，さらには自然の神秘的な営みへの驚嘆が，

明るく生き生きとうたわれている。それは生への限りない共感であり、自然の恵みに対するすがすがしい心の躍動である。

日中戦争が勃発(ぼっぱつ)すると、戦争讃歌や国策迎合的な詩を作る詩人が目立つようになる。さらに太平洋戦争に突入するころには、各地に「文学報国会」なる戦争協賛団体が組織され、文学界あげて戦意高揚に力を尽くす。そうした時代にも、月船は戦争を題材とする詩は作らなかった。ここで、あえて戦争に関係する詩を挙げるとすれば「英霊山にかえる」（1941年作）がある。

声なきは／み魂(たま)のみかは／夕景は／はたとしずまり／人らみな／頭あげえず／山の菊／ほのに明れり！

戦陣に散った兵士を哀悼し、み魂を悼み迎える詩である。帰還した英霊を故郷の山河も一切の風物も沈痛な表情で迎えているのである。遺族を初め迎える人たちも等しく痛恨にうちひしがれているのである。そこには、尊い人の命を奪い合う残虐な戦争への深い慨嘆と悲憤がこめられている。とすれば、これは暗に戦争を批判した詩といってよいであろう。

戦時体制下、村長という要職にあって、「詩人月船」は、決して時代に迎合しなかった。むしろ傲岸(ごうがん)に時代に背を向け、孤高を保ち、自節を曲げないで、独自の清澄な詩を作り続けた。そこに月船の面目が躍如としているのである。

7　第三詩集『明るきセレナード』

終戦後、月船は戦時中に村長をしていたという理由で公職を追放される。この時檀家の人たちは、「これで住職が熱心にお経を読んでくれる。」と喜んでくれたという。しかし、月船の多才と村民からの厚い信望は、僧職のみに専念することを許さなかった。特に1956（昭和31）年、町村合併により平川村が備中町になってからは、公民館長、教育委員長などに推挙され、多忙さは一段と増してくる。月船は、教育改革の行われた日本の新教育の推進にも力を尽くすのであった。こうした激動の時代、公務を遂行しながらも、月船の詩作意欲は衰えなかった。むしろ、戦後は月船の多彩な文学が花開くのである。

1947（昭和22）年9月、月船は第三詩集『明るきセレナード』を合同新聞社から出版する。もっとも、月船自身は序文で「これは第三詩集ではない。『秋冷』『花粉の日』からの14編も含む、その名の示す通り明るきセレナードの幾つかを集めた29編（筆者注＝新作は15編）の抒情詩集である。」と述べ、第三詩集『銀』を出す予定であった。が、これは未刊のまま。したがって『明るきセレナード』が結果的に第三詩集となっている。この詩集は戦後の物資不足という時代背景もあって、表紙・本文ともに楮生漉紙糸綴じのＡ5判変型48ページの小冊子である。装幀・カット（各ページごとに挿入）を竹内清氏が手がけている。定価は30円。

ちなみに、この詩集から「春のセレナード」と題する1編を掲げてみる。

朝のほど活(い)けし菜の花／こよひ、電燈(ともし)にみれば／さて、いきいきと水あげぬ／ほのぼ

のしき香り漂ひ／なつかしや／浮ぶとしもなく浮びいづる面影！／眼を病(や)めるといふ消息(たより)そのまゝ／あゝ、眼帯の真白さぞ際立(きわだ)ちて。
憂(うれ)たさよ！／さだかならぬ起居(たちゐ)の／あかるさよ！／灯に輝(き)らふ黄金(きん)の花の……
まじまじと見入れば／まじまじと消え／消ゆるともなくほのぼのとまた浮び出て……外(と)の面(も)は雨／ともしびにかゝる暈(かさ)はふくよかに……

自らが生けた菜の花の香りに触発されて、かつての意中の人を想起し、脳裏に去来する面影を追うという叙情的な詩である。古歌「さつき待つ花たちばなの香をかけば昔の人の袖の香ぞする」（古今集巻三・よみ人知らず）の心情に通ずる名詩である。古歌の艶麗な情趣、この詩の豊かな情感、いずれ劣らぬ名作である。

8　詩の集大成『赤松月船全詩集』

月船は1983（昭和58）年1月、永田書房から『赤松月船全詩集』を出版した。B6判変形函入（函には根津美術館蔵・乾山の色紙絵替り土器皿をカラーで印刷）、萌黄布表紙による豪華な装幀。446ページで定価は5500円である。これには既刊の『秋冷』『花粉の日』『明るきセレナード』に収録した詩151編と未刊の詩68編（「銀」「平川」「東京の家」「暁鐘」などの題目にまとめられた詩67編と訳詩1編）、計219編が載録され、文字どおり月船85歳までの詩の集大成となっている。

ただ、月船はこの詩集の「あとがき」の中で、「（小説を書こうと思って）苦しんだだけで、作品らしいものは、ついに出来なかった。山上の村の寺で、村のことに何かと携わりながら（筆者注＝平川村で助役や村長を務めていたことをさす）、また和尚としていろいろ辨舌を費やさなければならぬために、自然演壇に立つことが多かった。おしゃべりをしているうち何も苦しむことはなかったのだと、小説を書く書き方に気がついた時は、それから10年もたってからのことであった。つまり小説を書くことを志して、小説が書けなかったそういう人間の書いた詩が、私の詩なのである。」と自虐的に述べ、小説家たりえなかった無念さを暗ににじませている。

この全詩集に、瑞応寺以来の畏友中西悟堂と年来の詩友中村漁波林が懇切な跋文を寄せて月船の人となりとその詩業を称えている。

悟堂は、月船の詩風を「言葉を極端に削って清楚なものを、結びで胡椒(こしょう)をきかす抵抗があり、柔軟な象徴に自ら止(とど)めを刺す決断がある。彼自身も、『三角形の頂点は決って小さいのである』と言っている通り、その詩には饒舌(じょうぜつ)とは程遠い含蓄がある。」と称賛。その例として「良夜」と題する次の詩を挙げる。

戸を開けるなり窓から／小便をはじめた。／ぱりぱりと音がする。／する筈だ葉蘭(はらん)の上だ。／おもはずあははと笑ふ。／濡れた葉はまるで銀だ。／「何ですよ不行儀な」／ほんとに怒つてゐるらしい妻の声だ。／そこで私は答へる。／「起きてごらん、そりゃいい月夜だよ」

最後の１句に胡椒がきき、心憎いほど作品の味わいをひきたてているというのである。また、

断章　青空は深い／そこにあつて／たそがれはじめたものは／ああ、それは白い木蓮だ！

落葉　楓や栗や栃の落葉を／かきのけ、かきのけて／やつと見つけることの出来る泉のやうに／わたしの本性は／あまりに深く埋もれた。／私の虚偽を引き剥いでくれるものはないか？／私の臆病をかきのけてくれるものはないか？／人人よ／わたしはいま／自分の上に積みかさなつた落葉の／あまりに澤山なのに疲れてゐる。

豆蔓　豆蔓の伸びるはよし／しきりに雨の降りつづき／鬱陶しといふとも／わが思ふことは／他人（ひと）にたがへり／豆蔓の伸びるはよし。

木槿の花　三尺四方の窓から／汚ない四畳半の部屋を覗きこんで／こつこつ物を書く男に／秋の挨拶をする木槿の花よ／白い木槿の花よ。

などの10編を挙げ、いずれも「冴えた名工の芸」であり、「今の日本のどこを探してもないものがここにある。」と絶賛している。

また、漁波林は月船の全詩集の跋に「詩人・赤松月船」と題する一文を寄せ、その１節で次のように評している。

――１回通覧した。２回目は味読した。３回目はさらに熟読玩味した。わたしの頭は、いま月船詩で満員、飽和状態になった。もうろうとした頭の中から１篇をえらびだす。

暁天座禅　山鳩は／ゼゼツポツポウ！／――入る息をいきとおぼえず // うぐいすは／玉をころがす！／――出る息はいきとしるなし。

剣禅一致や、詩と宗教の解説について、くどくどと書いてきたが、この卓越した一篇の詩に行きついて、わたしは安堵した。これこそ最高の禅の世界を象徴した詩であり、動の中の静、しかも、「ゼゼツポツポウ！」「玉をころがす」静の世界から動へうつる心がまえも秘めている。用語はおもいきり捨てての表現でありながら、音楽的なリリックに富み、この小品が大宇宙を描いているのだ。優れた詩人の、これ以上は縮まらないという短詩風の秀作である。素朴なきわめて平凡なことばを選びながら、できあがった小曲詩の世界は、何10行にも及ぶ長詩以上の内容とふかさを包蔵している。（以下略）

月船の詩は澄明、清楚、鋭い感覚で研ぎ澄まされているという点に大きな特徴がある。数編の例を挙げる。

秋冷　深い渓流に臨んだ／断崖の家の窓から乗り出し／髪をすきながら／その白い裸身を／惜しげもなく／朝の嵐気に晒（さら）してゐる婦（おんな）は／何といふ爽やかな秋冷でせう！

夏　夏となる朝は／おもひもしづかにあれ――／白い壷に茅（ちがや）を挿す

断章　初冬は／水仙の蕾を／しづかにまもつてゐる。// いくら寒い夜だからといつて／骨の髄までこたへるものは／まあ水仙の匂ひぐらゐなものでせう。

秋の夜　かの支那の乙女の耳にかけし黄金の環の／ふとちりちりと澄みし音(ね)を立てしを／ゆくりなくもおもひいづる秋の夜の／さてもしづかなるともしのもとよ。

虹　八つ手の葉を／なぐりつける如く降る／夕立の気味よさを忘れ得ず／おもてに出でて／東の空に圓(まろ)くかかる虹の／そのあざやかさを見る。

暁鐘　五時だともうすつかり明けはなれている。／撞木(しゅもく)にかける手は／力をぬいて心だけをこめる。／柔らかいひびきが／鐘本来の音である。／ゴーン！// 柔らかいひびきは／鋭敏な鳥にも驚きとはならない。／朝の空には雲一つない。／ゴーン！// この場合、私には／山鳩がおるのさえ／何の心の翳しとはならない。

月船は生活上の愚痴や仕事上の不満を詩や文章にすることは決してなかった。憤怒・苦悩・悲哀・痛恨の情は極力抑制し、ひたすら昇華することに努めた。「抑制の日」と題する詩――

心そぐはざる友達／妻子あれどわれはただ一人／身の衰へはいちじるしく／秋空はまたあまりに陰鬱にすぎたり／みだるる心をいかにすべきぞ／せんすべなけれど／木斛(もっこく)の小枝を折りて瓶にさし／そを眺め／ひねもすみづから抑へんとす。

――が、それを如実に物語っている。

絶望感にさいなまれると、「ゴムマリ」の詩――

はづまなくなつたゴムマリを／お父さんの所へ持つて来たおさな児よ／お前が泣くのはほんとうだ／けれども、おさな児よ／お前のお父さんは、いま／はづまなくなつた自分の心を／何処(どこ)へ持つたものかと考へ中なのだ／私のおさな児よ／お利口だから、お前は／どうぞ泣かないで下さい／そして／お父さんに考へさして下さい。

――のように自らの心を静め、打開の道を探り、安らぎの境地を模索する。

そして、月船は「さびしい時にさびしい詩は書きはしなかった。さびしい時には寧ろ明るい詩を書いた」(『秋冷』の跋) のである。それを端的に物語る詩に「すすきの穂が出ると」「愚痴なすがた」などの名編がある。

すすきの穂が出ると　すすきの穂が出ると、／わたしは海を見に行きたい。／海を見て、／悲しみを笑ひのやうに明るくしたい。

愚痴なすがた　……私はさびしいときに微笑し／かなしいときには／思いきり色彩の鮮明な花を側におく。／それはウソだとおもうときに／ウソを本当に矯め直すために奮い立つ。／私のたしなみは／私だけが知つているといいたい！// 愚痴をこぼす代りに／私は一握りのエサを庭にまく。／小鳥たちが集つて来るのを見ている時が／或いは私の、／一番愚痴な姿かもしれない！

家庭人としての月船は、自らに言い聞かせるように「持ち物」と題して――

妻には／きれいな衣を／子供には面白い笛を／そしてわが身には／鷹揚な分別を

――とうたう。妻子には妻子にふさわしい持ち物を持たせ、自らは一家の要(かなめ)としての立場を自覚して生きようとする決意を表明している。そして何よりも平凡な日常生活と健全で

明るいわが家に満足し、そこに無上の幸福感を味わう。

わが家　夕日さす、／すすき原は銀だ！／ところどころの松の樹は／緑を輝かせた片側と／蔭になつた重い片側とをめいめいにもつて／それらの前景を／私は私のかへりゆく家に遠望する。／スレートの屋根と／白い露台と／水いろの壁と／それは晩秋の風景にふさわしかつた。／煙があがつてゐた――赤い空へ。／あの下には／生活を苦にしない微笑がある。／私の足どりは／ゆたかな稲の実りに沿ふてゐた。

さらには愛娘（まなむすめ）の健実な成長の姿に喜びをかみしめる自らの父親像をうたう。

父　それは　雨霽の朝であつた。／私の幼い娘は／足音を忍ばせて私の部屋へはいつて来た。／すみれの花をいくつか／コップの水に浮べ／こととともさせず卓上に置き／やがて又部屋を出て行つた。／無言にして出て行つた。／すみれの紫は水に引き立ち／目に沁みるほど新しかつた。／私の娘は九つであつた。／九つの娘に私は娘らしい心を見た。／わが子の成長を感ずることは父たるものの喜びだ。／私はこの日ほど／私が父であることに感動したことはなかつた。

最後に「老年」と題する詩を掲げる。

ゲエテがいつてゐる／年をとるといふことが／どうしても／避けることの出来ぬものならば／年よ、せめて／わたしを賢くせよと。／わたしは、しかし／ゲエテに忠言を呈したい。／大事なことは／賢くなることの上に／今一つ／その賢くなつたことを忘れることだ。

宗教者としての心と、詩人としての目でとらえた見事な人生観がさりげない言葉で言い尽くされている。人間のあるべき姿、生きるべき姿を道破した詩といえよう。

引用文献

(1)　生田長江・赤松月船『新作詩法入門』大京堂書店、1928年、155頁
(2)　赤松月船・佐藤八郎・神戸雄一『新興詩人選集』文芸社、1930年、１－２頁
(3)　第10回文化人を語る会『静かなる韻律－赤松月船師を語る会記録』笠岡愛の善意銀行、1981年、22－23頁
(4)　赤松月船『赤松月船全詩集』所収「花粉の日」永田書房、1983年、228－229頁
(5)　赤松月船『赤松月船全詩集』永田書房、1983年、13頁
(6)　同　429頁
(7)　木山捷平『自画像』永田書房、1975年、18－19頁

Gessen Akamatsu as a poet

Tsuneji SADAKANE
Courses in Japan Studies for Students from Overseas
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2008)

Gessen Akamatsu (a high priest of the Soto sect born in Kamogata Town, Okayama Prefecture,1897～1997) was fond of reading literary works and writing poems in his youth.

When Gessen was trained as a Buddhist priest, he longed for literature. Quitting being a priest for a while he went to Tokyo, and polished up his skill of making poems under the guidance of Choko Ikuta (a critic and translator).

After being a success in life, Gessen superintended literary coterie magazines to train younger persons, and exhibited remarkable activities as a selector and an editor of many kinds of poetic magazines.

Gessen, in his later years, devoted himself to composing poems as a member of literary coterie named 'Rempo', and he opened up his original poetic world, His contribution to the advancement of the Japanese poetry world is outstanding.

Gessen was widely engaged in literary work. Besides writing explanation books on Buddhist literature, essays on poetry, novels, essays, and children's stories, he composed a lot of songs of praise, and school songs.

In This paper, statements are made focusing on Gessen Akamatsu as a poet.